

ヤコブの手紙 2 章 14-26 節

「行為義認」

昨今、自然の猛威が日本のみならず世界各地で起きています。非人道的な出来事、大災害をニュース等で目の当たりにして、心を痛めながら、私たちは自分の無力さを感じます。しかし、私たちは祈ることができます。祈りは、信仰の第一歩です。時々、“祈ることしかできない”という嘆きを耳にします。けれども、祈りを“それしかできない”と否定的に捉えるべきではありません。なぜなら、私たちの信仰は、自分の力、人間の力をはるかに超えた神の力を信じるものだからです。人にはできなくても神にはできると信じるからです。そして、本気の祈りはきっと、“行動”を生み出すはずで、大きな行いはできないかも知れませんが、でもその小さな祈りがやがて実を結ぶ時が来ると信じたいと願うのです。

今日の聖書には、「もし、兄弟あるいは姉妹が…(15 節)」とあります。「兄弟」「姉妹」とは、血縁の者を指すのではなく、クリスチャン同士、あるいは信仰を超えた隣人のことです。その人たちがその日の生活に困っていることを知りながら、私たちが無関心であれば、「安心して行きなさい。」と口では言いながら何もしない、信仰の死んだ人になるのではないか、というのです。ヤコブにとって信仰とは、「そうすれば、わたしの行いによって、自分の信仰を見せましょう」(18 節)と言うように、行いが伴ってこそのものでした。御言葉を聞いて行う。生活の中で態度や行動として表わす。生き方となって現れる。それが信仰です。口だけ「主よ、主よ」と信仰を言い表す者ではなく、聖書の御言葉によって示された主なる神の御心を「行う」者が、神の救いの中に入れられると、イエスさまも教えてくださいました。

しかし注意すべきことは“行いによって救われる”と、「行い」を神の救いの条件と考えてはなりません。私たちは、善い行いをしたから、その功績によって神さまから報いられ、救われるのではありません。神さまの救いの恵みを信じる信仰によって救われるのです。「行為義認」ではなく、あくまでも「信仰義認」だとパウロがローマの信徒への手紙で語っています。けれども、ヤコブが教会を指導していた時代には、あまりにも行いの伴わない、口だけのクリスチャンが多かったのでしょう。信仰と行いを分けて考える人があまりにも多かったです。信仰があるから救われる、と高をくくっていた人が多く、行いが伴わなかったのです。自分を甘やかす、行うことから逃避するような信仰が横行していたのかも知れません。だからこそ、ヤコブは、信仰とは本来、行いを伴うものだと強調したのでしょう。そのことを、ヤコブは、旧約聖書に描かれているアブラハムの例、またラハブの例を挙げながら語っています。神さまは、アブラハムがご自分の言葉に従うか、御心を行うか、お試しになったのです。もしもこの時、アブラハムが“分かりました”と言いながら、何も行わなかったら、そこに本当の信仰があると言えるか、とヤコブは問っているのです。

「行いを伴わない信仰は死んだものです(26 節)」。

私たちは時々、“自分の信仰はこれで良いのか”と吟味する必要があるのでしょうか。善い行いの量によって報われ、救われるのではありません。主イエス・キリストも歩まれた、愛による行いの道へと、本当の信仰の道へと、私たちも招かれているのです。行いの伴った信仰、救いに至る信仰を全うしたいと願います。